

円卓シネマを通じた異文化理解の試み

岡田靖子・澤海崇文⁽¹⁾・いとうたけひこ⁽²⁾

Abstract:

Promoting intercultural dialogue through roundtable cinema

Roundtable cinema is a unique attempt to promote intercultural dialogue by watching and discussing a film with those who have diverse cultural backgrounds. In line with this concept, this study attempted to provide an opportunity for Japanese youth to watch a South Korean film with those who had different ages and discuss the film while increasing their understanding of its society and history. Participants were four first-year students learning Korean at a two-year college in Japan. After the viewing, participants discussed the content of the film, with researchers as moderators. A discussion, pre- and post-questionnaires, and reflection papers were analyzed for the study. Findings from the open-ended questionnaire revealed that it would be beneficial to enhance a new insight from film watching and discussion afterward and consider the relationship between Japan and South Korea from a different point of view. The study suggests pedagogical implications of roundtable cinema as part of intercultural education.

Keywords: dialogue, roundtable cinema, intercultural understanding, Korean as a foreign language learner, text mining

要旨:

円卓シネマとは、異なる文化を持つ人々が一緒に映画を鑑賞したのちに、対話を通して文化的背景の違いを受け入れるという新しい異文化理解の試みである。本研究ではこの円卓シネマの考え方を援用し、日本人の若者が年齢の異なる者と共に韓国映画を鑑賞し、映画を介して対話をし、韓国社会や歴史への理解を深めるかどうかを検討することを目的とした。短期大学で韓国語を学習する1年生4名が参加した。映画鑑賞後の対話には、研究者2名がモデレーターとして参加した。映画鑑賞の前後に実施された質

¹ 流通経済大学

² 和光大学

問紙調査、鑑賞後の対話の音声データと議論の振り返りの自由記述の結果を分析した。自由記述回答の分析から、映画鑑賞と対話が韓国の歴史についての新たな知見を学ぶきっかけとなるだけでなく、日本と韓国との関係を異なる観点から捉えるきっかけになることが示された。本研究の結果は、異文化教育の一環として円卓シネマを実施することへの示唆を与える。

キーワード：

対話・円卓シネマ・異文化理解・韓国語学習者・テキストマイニング

1. 問題

1.1 はじめに

異文化理解とは、自分とは異なる国や言語、文化的背景を持つ相手の考えや価値観を尊重し、それを受け入れることである。従来、日本国外で就労する場合を除いて、私たちが外国語を使用する必要はなかった。しかし近年では、国内における労働者不足を解決するという理由から、外国人の受け入れを拡大してきている。総務省（2021）の住民基本台帳によると、2021年1月1日の時点で、日本人住民は126,654,244人と12年連続で減少している。一方、外国人住民は2,811,543人で、前年と比べると減少しているものの、6年連続で増加している。また、町村部における外国人住民は、2013年に調査を開始して以来、2020年まで増加の傾向が続いている。ここから、国内に増加している外国人と共生していくためには、日本人の価値観を相手に押し付けるのではなく、相手の文化的あるいは歴史的な価値観を理解する必要があると考える。

「異文化理解教育」という用語は、稀に「国際理解教育」や「グローバル教育」と同じように扱われることがある。しかし、この3つの教育目的は同じというわけではない。異文化理解教育は、「異なる文化を持った人々が世界の中で協調、共生していくために、文化間の共通性や差異性を相互に認識し、互いの価値観や行動様式を受容し、尊重することのできる資質・能力を養うことを目的にした教育」（森茂、2012）であるのに対し、国際理解教育は、「国際化・グローバル化した現代世界/社会の中で生きていくために必要な資質や能力を育成する教育」（大津、2012）である。また、グローバル教育は、「人やモノ、カネ、情報が国境を越えて広がる世界及

び社会（グローバリゼーション）とそれが引き起こす地球的な諸問題について、教育においてどう対応すべきか、どんな資質や価値観を育てていけばよいのかといった問題意識を持った教育」（藤原、2012）である。このように、3つの教育目的にはそれぞれ異なる定義が与えられている。国際理解教育やグローバル教育では、将来グローバル社会で活躍するために必要な資質や能力を育てることが重視されているのに対し、異文化理解教育では、人間の本質をお互いに尊重し合うことの必要性が強調されている。異文化理解教育のために実践されている主な取り組みには、海外経験者や国際ボランティア経験による体験の共有や、日本人と留学生の交流などが挙げられる。そのなかで、映画を通してお互いの文化的な違いを認めるという取り組みは、異文化理解の有力な教育方法として活用が期待される。

そこで本研究では、異文化理解教育の一環として映画を活用した対話への取り組みを実践し、日本人学生の異文化に対する理解を深めることを目指した。

1.2 異文化理解の位置づけ

外国語教育には学習者が言語を学ぶ理由を考え、言語に対する歴史的・文化的視点からみた問題意識や関心を示すことで異文化と接触し、自己形成をするための教育でなければならないという考えがある（溝上・柴田、2009）。日本では戦後、アメリカの支配下のもとで英語教育が再開された。その後、長年にわたって、中・高等学校では英語教育が続けられてきた。近年では急速に進むグローバル化に対応するため、文部科学省は2020年度から小学校で教科として英語を導入し、小・中・高等学校による英語教育の連携化を進めている。今後の外国語教育では、言語の背景にある文化や歴史なども含めた指導を行うことで、学習者が自分とは異なる文化的背景を持つ他者を尊重し、相手に対する理解を深めることが目指される。

1.3 交流による異文化理解

日本の大学では、海外の学生との交流授業を通して異文化理解プロセスの検討が行われている。呉・崔・山本（2014）では、集団間における異文化理解を目指す方法論を検討するため、日本と韓国の大学生が交流授業に

参加し、授業の中で中国・日本・韓国および日韓共同の映画を鑑賞した後、学生同士が対話し交流した。その結果、交流授業では学生が個人の立場からだけでなく日本人としての立場から、自分あるいは自分たちという意識を高めたことが示された。日本と中国の大学生間で手紙を通じた交流授業を実施した榊原・片・高木（2012）の研究では、日本人大学生の異文化理解プロセスが検討され、相手の文化的信念の相対性を尊重する傾向が見られたことや他者への理解プロセスが変化したことを報告している。Lin（2018）は、アメリカとトルコの大学生のメールでのやりとりが、学習者の異文化コミュニケーションスキルを高める可能性があることを示唆した。これらの先行研究から、異文化理解には同世代の交流が効果的であることがわかる。

大学生以外を対象にした異文化理解教育の試みとして円卓シネマが挙げられる（伊藤・山本、2011；Oh, 2017；山本・伊藤、2005）。円卓シネマとは、異なる国の人々が文化的背景の違いを理解するために、お互いの国の映画と一緒に鑑賞し、対話を繰り返す試みである（伊藤・山本、2011）。伊藤・山本（2011）では、日本人と韓国人が日本映画、韓国映画、日韓共同ドキュメンタリー映画と一緒に鑑賞した。鑑賞後、映画についての率直な感想を伝えあう対話の機会を設け、相手の文化に対する理解を深めたり、自分の文化との違いに着目したりすることを目指した。その結果、自分自身を見つめるためには、円卓シネマを通して異なる文化的背景を持った他者と対話し、お互いの存在を認めたり、否定したりする必要があり、このようなプロセスを経験することで「個を超えた文化的アイデンティティ」を確立させることができると指摘している（伊藤・山本、2011）。円卓シネマなどの異文化教育の試みは、外国語を学んでいる学習者にとってもその言語の背景となる文化や歴史を理解するきっかけとなりうる。しかし、これらの先行研究で実施されてきた異文化理解教育での試みは外国語学習者を対象としていなかった。外国語学習では、その言語を学習するだけでなく、その文化に対する理解を深めることも重要である。なぜなら、相手の文化や歴史的背景を理解することで異文化に対する先入観を取り除き、日本では常識であっても他の文化では通用しないことに気づくようになり、コミュニケーションの成功に結び付けることが可能になると考えられるか

らである。本研究では、韓国語学習者を対象にして、映画鑑賞を通じた異文化理解教育の可能性を検証することを目指す。

1.4 日本における韓国語学習

第2次世界大戦後、韓国では日本の大衆文化の流入が原則的に禁止されていたが、日本には1960年代から一部のマニアを対象として、韓国映画が登場していた(韓、2013)。40年程前に質問紙を使って実施された日本人の韓国や韓国人に対する態度の研究では、国家に対する態度は非好意的であるのに対し、韓国人に対する態度は好意的である傾向を報告している(村田・古畑・宮田・田中、1979)。村田他(1979)では、5段階評定を使用し質問紙調査を実施した結果、日本人の韓国国家に対する印象として、好意的叙述では「自由な空気がある」(1.96)の平均値が最も低く、また非好意的叙述⁽³⁾では「軍部に支配された国である」(1.98)と「弾圧的政治が行なわれている」(1.93)が最も低い平均値を示していた。しかし、1998年に発表された日韓共同宣言で二国間の文化・人的交流の拡大の重要性が示されると、日本では韓国大衆文化ブームが起り、多くの韓国文化や生活様式が日本人に紹介されるようになった。

このブームは日本人の韓国語学習者数の増加にも大きく貢献した。韓国政府が認定している韓国語能力試験(Test of Proficiency in Korean: TOPIK)では、初回の1997年の受験者数は1,353人であったのに対し、2019年には21,070人に上った⁽⁴⁾。同様に、日本語母語話者を対象としたハングル能力検定の受験者数は、初回の1993年は3,295人であったのに対し、2017年には18,669人に上った⁽⁵⁾。このように、日本における韓国語学習に対する意欲が高まっているにもかかわらず、先行研究では大学教員や大学生、研究員(伊藤・山本、2011)、大学生(Lin、2018; 呉他、2014; 榊原

³ 村田他(1979)では、簡易法で叙述の好意・非好意に応じて得点の配点を逆にし、得点が高いものほど好意的であることを示す。

⁴ 1997年受験者数のデータは韓国教育財団から引用。
<https://www.kref.or.jp/img/pdf/count.pdf> (2022年5月6日閲覧)

2019年受験者数データは韓国国立国際教育院から引用。
<https://www.topik.go.kr/TWGUID/TWGUID0010.do> (2022年5月6日閲覧)

⁵ 受験者数データについては、ハングル能力検定協会(<https://hangu.or.jp/>)に問い合わせて入手した。

他、2012)などを対象にしているが、日本人の韓国語学習者を対象にした交流による異文化教育の試みは皆無である。

2. 研究

2.1 目的

本研究では、(1) 異文化理解教育のために韓国映画を活用することの有用性、(2) 映画についての対話を通し、韓国語学習者が学んでいる言語の背景に対する理解を深める可能性について検討する。

日本ではこの20年間、韓国のK-popなどの大衆文化への関心が高まり、特に若者の間で韓国語を学習する人が増加している。一方、日本と韓国は、歴史的にみて、これまで複雑な経緯を辿ってきており、それが原因で政治的および経済的な対立が繰り返されている(例えば、田中、2019)。これからの韓国語教育では、歴史的な観点からも日本と韓国との関わりについて学習者の知識を深めさせ、異文化理解を育むことが期待されている。

2.2 調査対象者

埼玉県内の短期大学で韓国語コースを履修している1年生に2019年7月、調査研究への協力を募った。本研究では、研究協力に同意した女子学生4名を対象とした。研究協力者には口頭で研究概要を説明し、研究への同意の確認を書面にて行った。研究終了後には、研究協力への謝礼を渡した。

先行研究(伊藤・山本、2011; 山本・伊藤、2005)で実践された本来の円卓シネマでは、日本人だけでなく韓国人も映画鑑賞と対話に参加していた。本研究でも当初、先行研究(伊藤・山本、2011; 山本・伊藤、2005)のような対話を試み、参加者とは別の大学に留学している韓国人学生らに参加を促してみたが実現しなかった。そのため、やむを得ず、日本人学生と日本人教員とで実施することになった。本研究では第一著者(岡田)と第三著者(いとう)が若者との対話にモデレーターとして加わっており、その役割が従来円卓シネマよりも大きく、また概念的にも先行研究とは大きく異なっていたことが特徴である。

2.3 手順

本研究は2019年7月に実施された(図1)。所要時間は、セッション1が140分、セッション2が65分で、平日の昼休み(60分)と連続した授業の空き時間(80分)を利用して実施された。セッション1と2の間隔は1週間であった。

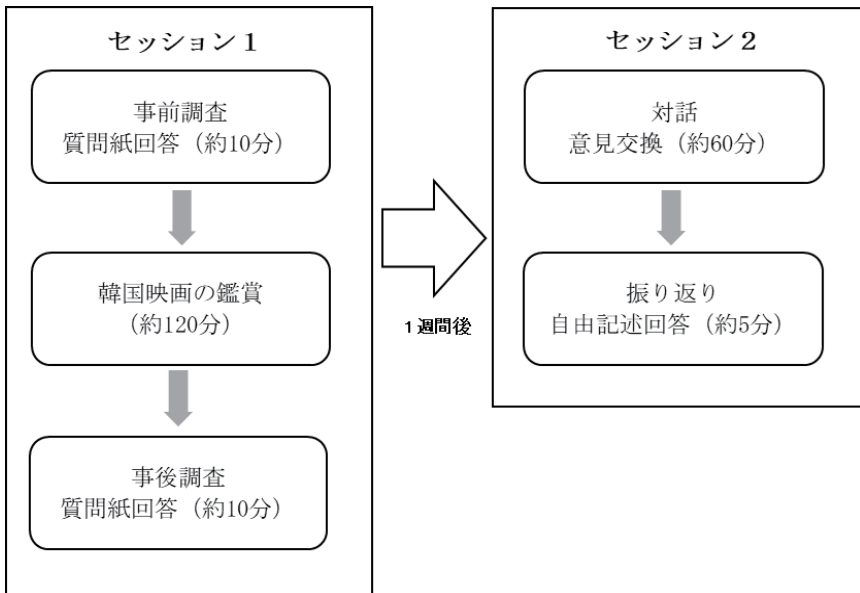


図1 研究手順

2.3.1 事前・事後調査

参加者の韓国や韓国人に対する態度の変化を調べるため、先行研究(村田他、1979)の中で扱われていた「韓国に関する態度尺度」を事前・事後調査として使用した(付録1)。46項目から構成されており、21項目は韓国国家に対する尺度項目で、好意的叙述(1-11)と非好意的叙述(12-21)で、残りの25項目は韓国国民に対する尺度項目で、韓国国家と同様、好意的叙述(22-33)と非好意的叙述(34-46)であった。

また、参加者の韓国や韓国人との関わりを理解するため、事前調査では、稲垣(藤井)(2017)が作成した「韓国との接触経験尺度」を参考にして

5項目を作成した(付録2)。事後調査では、映画の視聴後の参加者の韓国や韓国人に対する関心度の変化を調べるための尺度として、稲垣(藤井)(2017)の「韓国への関心尺度」を参考にし、9項目を作成した(付録3)。なお、韓国に関する態度尺度と韓国への関心尺度は、5件法(1:全くそう思わない、2:そう思わない、3:どちらとも言えない、4:そう思う、5:とてもそう思う)で回答を求めた。

2.3.2 使用した映画

韓国で2014年に公開された『国際市場で逢いましょう』(原題『국제시장』)を本研究で使用した。この映画では、主人公の男性の人生が、(1)興南撤収、(2)西ドイツ炭鉱への出稼ぎ、(3)ベトナム戦争、(4)離散家族探しの順に描かれている。この映画を選んだ理由は、韓国で観客動員が歴代2位となったヒューマンドラマであり、1950年代以降、韓国人が経験した激動の時代を理解するのに相応しいと考えたからである。参加者は韓国語音声、日本語字幕付きで映画を鑑賞した。

2.3.3 対話とその振り返り

対話には映画を鑑賞した学生4名が参加し、第一著者と第三著者はモデレーターの役割を担った。映画を鑑賞して気づいたことや日本と韓国の類似点や相違点について自由に述べてもらった。分析のために対話の様子をビデオで撮影した。振り返りでは、円卓シネマの対話に参加して感じたことや気づいたことを自由に記述してもらった。

2.3.4 分析方法

質問紙調査のうち韓国に対する態度尺度の分析では、因子ごとに態度尺度のクロンバックの α 係数を検討した。その結果、事前・事後では、「国に対する好意的叙述」が $\alpha = .81, .76$ 、「国に対する非好意的叙述」が $\alpha = .40, .70$ 、「韓国人に対する好意的叙述」が $\alpha = .87, .87$ 、「韓国人に対する非好意的叙述」が $\alpha = -.93, .48$ であった。国に対する非好意的叙述の事前調査および韓国人に対する非好意的叙述の事前・事後調査で、低い信頼性係数を示したことから、本研究では質問紙調査の統計分析は行わず、各項

目の平均値と標準偏差を報告し、結果をまとめることにした。韓国との接触経験尺度では結果を報告し、韓国への関心尺度の分析では記述統計を行った。

学生と教員の対話はビデオ録画し、文字起こしを行った。そのテキストを分析データとし、テキストマイニングを用いて学生の記述の特徴語やキーワードの出現頻度を分析した。教員と学生の立場の違いによる特徴的な出現語彙は、Text Mining Studio⁽⁶⁾ を使い抽出した。抽出の際に用いた補完類似度は澤木・萩田（1995）によって開発された指標である。例えば、「韓国語」という単語に注目するとき、

- a: 学生の発話に出現した「韓国語」出現頻度
- b: 教員の発話に出現した「韓国語」出現頻度
- c: 学生の発話に出現した「韓国語」以外の単語の出現頻度
- d: 教員の発話に出現した「韓国語」以外の単語の出現頻度

とした場合、補完類似度の指標は以下の式で表される。

$$\frac{ad - bc}{\sqrt{(a + c)(b + d)}}$$

補完類似度は単語の出現頻度も考慮しているが、その属性に偏って出現している単語を抽出している（服部、2010）。この指標が大きいと、その単語が属性の中で特徴的であるということが出来る。さらに、学生の発言や記述の特徴を視覚的に伝えるために UserLocal⁽⁷⁾ を用い、ワードクラウドを作成した⁽⁸⁾。

振り返りの自由記述回答では、学生の記述の特徴的な語彙を視覚的に伝えるため、対話内容の分析と同様、UserLocal を用いてワードクラウドを作成した。

3. 結果

3.1 韓国に対する態度尺度の記述統計結果

表 1 に韓国・韓国人に対する態度について事前・事後調査の平均値と標準偏差を示す。全体的な傾向として、好意的叙述について大きく変化した項目が見られた。例えば、韓国については「合理的価値判断を重視している（項

⁶ 流通経済大学

⁷ ユーザーローカル (<https://textmining.userlocal.jp/>) を参照。

⁸ Text Mining Studio にはワードクラウド作成機能が含まれていなかったため、UserLocal を使った。

表1 韓国・韓国人に対する態度尺度の結果

	事前調査		事後調査	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
韓国という国は…				
1 将来性のある国である	3.00	0.82	3.50	0.58
2 社会生活の改善がめざましい	3.50	0.58	3.75	0.50
3 合理的（＝無駄なく能率的な）価値判断を重視している	2.25	0.50	3.50	0.58
4 国民の福祉向上に力を注いでいる	2.50	0.58	3.50	0.58
5 人道的（＝人として守り行すべき道にかなった）国家である	1.50	0.58	4.00	0.82
6 民主的国家である	2.00	0.00	3.50	0.58
7 柔軟性のある国家である	2.00	1.15	3.00	0.82
8 有能な人材が拔擢される	4.50	0.58	4.75	0.50
9 社会が活気に満ちている	3.50	1.00	3.50	0.58
10 官僚（＝役人）組織が健全である	2.75	1.26	3.00	0.82
11 自由な空気がある	3.50	0.58	3.25	0.96
12 好戦的な（＝すぐ武力に訴える）国である	3.75	0.96	3.75	0.96
13 自国の非より他国の非を責める	3.25	1.71	3.50	1.29
14 不気味な国である	2.50	1.00	2.50	0.58
15 政治が腐敗している	3.25	0.96	3.00	0.82
16 独裁国家である	2.75	1.26	2.75	1.26
17 無実の人が苦しんでいる	2.25	0.96	3.25	0.96
18 言論の自由がない	2.75	0.50	2.00	0.82
19 政情（＝政治のなりゆき）が不安定である	2.50	1.00	3.00	0.82
20 軍部に支配された国である	3.25	0.96	3.00	0.82
21 弾圧的（＝害を加える）政治が行われている	3.00	0.00	2.50	1.00
韓国人は…				
22 忍耐強い	3.50	0.58	4.50	0.58
23 平和を愛好する	3.25	0.96	4.50	0.58
24 礼儀正しい	2.50	0.58	3.50	0.58
25 思慮深い	2.75	0.96	4.25	0.50
26 自由を愛好する	3.25	0.96	3.75	0.96
27 平等を志向する	3.50	1.29	4.00	0.82
28 知的である	3.50	1.00	3.25	0.50
29 親切である	3.25	0.96	3.67	0.58
30 義理堅い	3.00	0.82	3.50	0.58
31 友好的である	4.25	0.50	3.50	0.58
32 寛容である	2.75	0.50	3.25	0.50
33 陽気である	3.00	0.82	3.50	0.58
34 知性が乏しい	2.75	0.50	2.50	0.58
35 信頼できない	3.25	0.50	2.50	0.58
36 卑屈（＝いじけて、必要以上にいやしめること）である	3.00	0.82	3.00	0.82
37 残酷である	3.00	0.82	3.50	0.58
38 攻撃的である	3.00	1.15	3.00	0.82
39 好戦的である	4.00	0.00	3.00	0.82
40 自己中心的である	3.33	0.58	2.50	0.58
41 敵愾心（＝相手に対する闘争心）が強い	3.00	0.82	3.75	0.96
42 権力におもねる（へつらう）	3.00	0.00	3.25	0.50
43 陰湿である	2.50	0.58	3.00	0.00
44 偏見が強い	4.00	0.00	3.75	0.96
45 反日的である	3.25	0.96	3.50	0.58
46 執念深い	3.00	0.82	3.00	0.00

目3)」や「人道的国家である(項目5)」「民主的国家である(項目6)」の事前と事後の平均値の差を比較すると、他の項目より大きかった。また、韓国人については、「平和を愛好する(項目23)」と「思慮深い(項目25)」の平均値の差が他より大きいことが示された。一方で、韓国についての非好意的叙述では、「自国の非より他国の非を責める(項目13)」や「独裁国家である(項目16)」のように、事前と事後の標準偏差が大きく、参加者の回答にばらつきが見られる項目もあった。事前・事後調査の「有能な人材が抜擢される(項目8)」や事後調査の「忍耐強い(項目22)」、「平和を愛好する(項目23)」などでは、平均値に標準偏差を足したものが5.00を超えることから、「天井効果」が見られた。

3.2 韓国との接触経験尺度の結果

事前調査の一部として実施された「韓国との接触経験に関する尺度」(付録2)の結果は以下の通りである。まず、これまでに韓国を訪問した回数を尋ねたところ、0回と1回がそれぞれ1人、2回が2人であった。次に、韓国人の友人の数について質問したところ、3人がゼロであったのに対し、1人は友人が2人いると回答した。3つ目に、韓国のテレビ・ドラマを視聴する頻度では、1(全く見ない)、2(ほとんど見ない)、3(多少見る)、4(よく見る)のそれぞれで1人ずつ回答した。4つ目に、日韓交流イベントへの参加経験を尋ねたところ、全員が一度もないと回答した。最後に、韓国アイドルのコンサートやファンミーティングへの参加経験については、全員が2回以上行ったことがあると回答した。

3.3 韓国への関心尺度の分析結果

事後調査で実施した韓国への関心尺度の記述統計結果は、表2のとおりである。平均値が一番高かった項目は、「韓国についてもっと調べてみようと思った(項目49)」($M=4.25$, $SD=0.96$)と「韓国社会への関心が深まった(項目52)」($M=4.25$, $SD=0.50$)の2つであった。一方で、平均値が一番低かった項目は、「韓国は好きではない(項目47)」($M=2.50$, $SD=0.58$)であった。また、項目53-55は他の項目と比べると、平均値からのばらつきが大きかった。項目48, 49, 51, 52の回答の平均値が高いことから、

表2 韓国への関心尺度の結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>
47 韓国は好きではない	2.50	0.58
48 前より韓国について知っていることが増えた	4.00	0.82
49 韓国についてもっと調べてみようと思った	4.25	0.96
50 韓国とは距離を感じる	3.00	0.00
51 韓国文化への理解が深まった	4.00	0.82
52 韓国社会への関心が深まった	4.25	0.50
53 朝鮮戦争についてもっと知りたいと思った	3.25	1.71
54 ベトナム戦争についてもっと知りたいと思った	3.00	1.63
55 韓国人によるドイツへの集団出稼ぎについてもっと知りたいと思った	2.75	1.26

映画鑑賞によって学習者の韓国に対する関心は広がったことが示された。一方、項目 53-55 で具体的な歴史的事実に対する興味に関する項目への回答から、映画鑑賞がこれらの歴史上の事実に対する学習者の関心を高める効果は見られなかった。

3.4 対話で使用された特徴語の分析結果

円卓シネマの対話で学生と教員が使用した特徴的な語彙とその指標値を表3に示す。特徴語の上位3語は、学生では「思う」「日本」「感じ」、教員では「いう」「国」「皆さん」であった。対話で学生の意見を述べる機会が多かったことから、「思う」が一番特徴的な語として抽出された。学生側では、視聴した映画に関連した表現「妹」が特徴的な語彙として示された。また、学生の発話では **K-pop** に関連した「バンタン」「秋元康」「曲」、教員の発話では歴史事実に関連した「沖縄」「中国」「朝鮮戦争」「チョコレート」などの単語が抽出された。これらの単語の出現頻度の比率はそれほど大きくなかったが、補完類似度の指標値が大きいことから、それぞれの属性の中で特徴的だと言える。

次に、対話における学生の発言のみをデータとし、ワードクラウドを作成した(図2参照)。学生の発言の特徴的なものを検討した結果、韓国の歴史的な出来事ではなく、現代の大衆文化に関連した発言が多いことが特徴的であった。

表3 立場による特徴語の違い

	立場-学生	標準値	立場-学生	立場-教員	標準値	立場-教員
1	思う	18.190	いう	27.082		
2	日本	9.701	国	7.421		
3	感じ	8.943	皆さん	6.196		
4	やる	8.867	そういうこと	5.507		
5	言う	7.718	沖縄	5.507		
6	妹	7.339	辺	5.431		
7	行く	6.802	Kさん	4.819		
8	自分	6.726	中国	4.819		
9	やつ	6.575	映画	4.440		
10	サクラ	5.810	1つ	4.130		
11	バンタン	5.810	出る	4.130		
12	秋元康	5.810	大変	4.130		
13	友達	5.198	朝鮮戦争	4.130		
14	そんな	4.358	ふう	3.442		
15	荷物	4.358	シーン	3.442		
16	韓国側	4.358	チョコレート	3.442		
17	曲	4.358	釜山	3.442		
18	見せる	4.358	南	3.442		
19	世界	4.358	北	3.442		
20	売る	4.358	人	3.372		
21	普通	4.358		0.000		

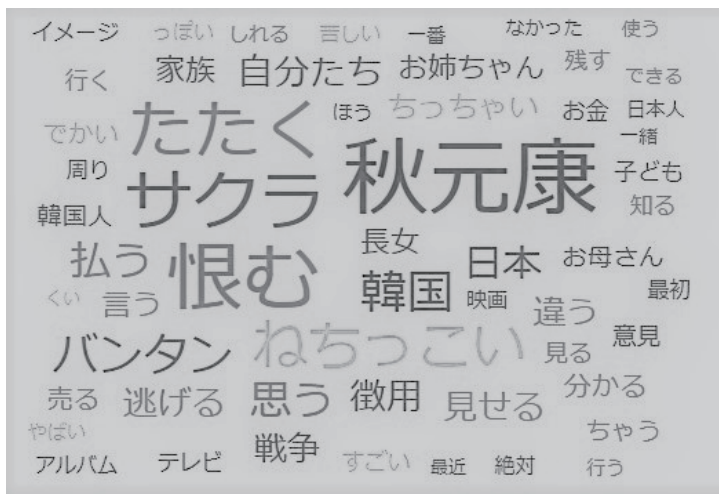


図2 ディスカッションにおける学生の発言

以下は学生1の発言の例である⁽⁹⁾。BTSとは世界的な人気を得ている韓国人7人組のヒップホップグループである。このグループは秋元康に楽曲を提供されたが、政治的な背景が絡んだことにより、その楽曲提供が中止になった。学生1はそのことについて言及している。

BTSに秋元康が曲提供して、日本語の曲、でもそれを韓国のファンは、安倍側の人間だからみたいなの、秋元康が、だからその曲なくなっただけですよ。だから、日本人は、秋元康が安倍さんを好きだからといって別に何とも思わないのに、韓国側は、そんな思うんだなと思って、そこも違うあれだなって。(学生1)

3.5 円卓シネマの振り返り

円卓シネマに対する自由記述回答で高い頻度で出現した単語を示すため、ワードクラウドを作成した(図3)。名詞の特徴語として「ディスカッション⁽¹⁰⁾」「韓国」「若者文化」「韓国の歴史」が挙げられ、動詞の特徴語として「理解し合う」「出し合う」「歩み寄る」が挙げられた。

学生2の記述例では、普段はあまり考えない日本と韓国の歴史的・政治的背景から生じる問題について、韓国のアイドルグループを媒介として知識を得ることができたと記された。

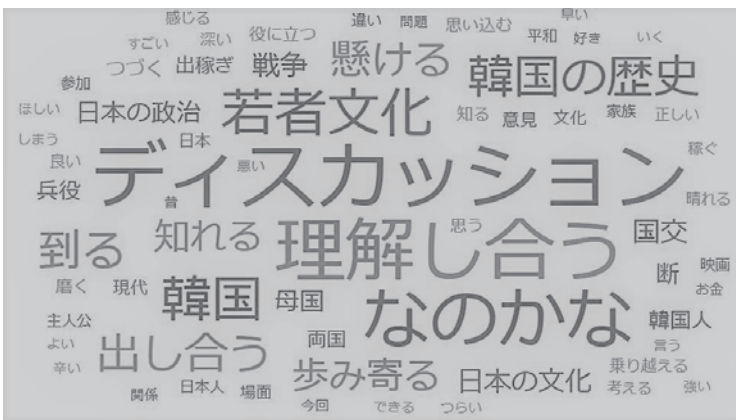


図3 ディスカッション後の振り返りの記述

話をしていくうちに、現在の韓国と日本の政治問題についても考えられてすごく頭が疲れました。でも、自分の好きなアイドルグループの反日問題の事も個人的に考えられてよかったなと思いました。(学生2)

学生3は、日本と韓国との関係について、「自分たちのほうがもう少し譲歩すべきだ」との考えを述べている。

私は日本人だから、どうしても日本人の味方ぎみになってしまいますが、韓国人の言っていることも正しかったりするので、お互いがもっと意見を聞き合って、譲り合いをしたほうが良いと感じました。(学生3)

4. 考察

本研究では、異文化理解教育の観点からの韓国語映画の活用の検証と、映画についての対話を通し、学習者が学んでいる言語の背景について理解を深める可能性を検討することが目的であった。

4.1 質問紙調査の結果の考察

本研究では、「韓国との接触経験」「韓国に対する態度」「韓国への関心」についての質問紙調査を実施した。韓国との接触経験を分析した結果、参加者の傾向として、韓国人の友人はおらず、日韓交流イベントには興味は示さない反面、自分の興味のある韓国人アイドルのコンサートやファンミーティングには参加することが挙げられる。テレビやドラマを視聴する頻度は、参加者によって個人差が大きいことから、自分が関心を持つアイドルが出演していれば見るかもしれないが、そうでなければ特に興味がないというように、韓国人アイドルであれば誰でもいいわけではなく、自分が興味を示す特定のアイドルに対する応援する活動、いわゆる「推し活」の広まりが考えられる。

韓国に対する態度について、先行研究(村田他、1979)では軍事支配や弾圧的政治などのイメージを抱いている日本人が少なくないことが示されたが、今回の研究では同様の傾向は見られなかった。村田他(1979)の質問紙調査が実施された当時の韓国は、軍人出身の朴正熙を中心とする開発独裁体制が

敷かれていた。経済成長を遂げてはいたが、地域間経済格差が深刻な問題として取り上げられていた時代であったことから（上河原、2015）、日本人が抱く韓国に対するイメージはあまり良くなかったことが想像できるであろう。また、46項目のうち、いくつかの項目では平均値が上昇したが、参加者が4名と少なかったことから、実際に映画の影響があったかどうかを見極めることは困難である。今後、サンプルサイズを大きくしたうえで同様の研究をすれば、より詳しく映画鑑賞の効果を確認することが可能になるであろう。

この研究で使用した映画では、参加者の歴史的事実に対する関心を高める効果は見られなかった一方、韓国社会や文化に対する理解を深めることができた。今回、参加者が視聴した映画では、参加者の間でよく知られている俳優が出演していなかったため、映画で取り上げられた事実についての興味を高めることが難しかったかもしれない。異文化理解教育を目的として、日本人の若者に韓国映画を見せるのであれば、今後は若者に人気のある韓国人アイドルが出演する映画を活用することも有用であろう。

4.2 テキストマイニングの分析結果の考察

特徴語分析の結果、「バンタン」や「秋元康」などの若者にとっては身近なK-pop 関係の話題に関する発言が見られた。一方、教員側からは「沖縄」や「中国」など教育的および補足的発言が見られた。これは、参加者と教員の間には話題のズレが生じていることを示唆している。その理由として、情報収集源が異なることが挙げられる。若者は、K-pop などの音楽を通して、反日感情などを含む韓国の日本に対する態度に敏感に反応している可能性がある。例えば、50代や60代と比較した場合、今の若い世代はテレビや新聞に触れる時間は短くなっているものの、スマホやパソコンなどのインターネット電子端末を使ってメディアに接触する時間が長くなっている。とりわけ、時事ニュースなどに関してはインスタグラムやツイッターなどのソーシャルメディアから入手することが報告されている（白戸、2021）。このように、世代間によってマスメディアの入手媒体が異なっていることが、話題の隔たりを生み出す原因となっている可能性が高い。

4.3 円卓シネマの振り返りの考察

他者への理解が異文化理解教育で強調されているように、参加者の円卓シネマの振り返りでは、日本と韓国の関係ではお互いの歩み寄りや理解の重要性を指摘している。学生2が述べているように、2国間の関係について政治・経済的な観点から考えることに慣れていないかもしれない。しかし、2国間の歴史的事実を **K-pop** などのアイドルグループを媒介として認識することで、自分たちにとって身近な話題として捉えることができるようになるであろう。今回の円卓シネマの取り組みでは、**BTS** を媒介とした2国間の問題についての発言が見られた。日本と韓国での異文化理解を進め、お互いをよく知るために、日本人の若者が韓流スターや **K-pop** アイドルを通して従来の日韓関係の在り方を認識し、同世代の者だけでなく、世代を超えた者による人的交流を実現し進めていくことは効果的だと考えられる。

4.4 映画の教育的活用

本来、円卓シネマは、多様な文化的背景を持つ人同士の対話を基本としているが、本研究では国（日本と韓国）を単位とした異文化ではなく、世代（学生と教員）を単位とした異文化理解という結果になった。しかし、韓国語を学習している参加者が映画鑑賞と対話を経験することで、韓国語の背景にある歴史や文化を体験できたことは有益であったと考えられる。もし、韓国映画を使って円卓シネマを実践した先行研究（伊藤・山本、2011；山本・伊藤、2005）のように、本研究でも韓国の出身者が参加していれば、活発な対話を実現していたかもしれない。日本人の韓国語学習者と日本に興味を持つ韓国人による文化理解という点で、これまでの研究で示されなかった効果を得ることができたであろう。この点については今後の課題としたい。

4.5 本研究の意義

本研究の意義は、円卓シネマを「ナラティブ教材」の活用の変えることができたということである。小平・いとう（2013）によると、看護学でのナラティブ教材とは、「患者の病いの体験を患者や家族などが自ら自

分のことばで語った物語りが表現された作品であり、学習者にとってその体験の理解を促進したり、助けになる目的で看護教育などに利用されうる形に教材化されたもの」(p. 57) とされる。ナラティブ教材としての映画やビデオは視覚的に現実感があり、感情的に訴える力もあることから、効率的な学習が可能であると指摘されている(小平・いとう, 2009)。本研究では、韓国人の視点からその国の歴史的事実を描いた映画を通して、過去の出来事に対する理解を深めたり、韓国の歴史的事実に対する相対性を尊重したりすることの難しさが浮き彫りになった。今後の研究では、ナラティブ教材としての映画の利用価値を認めつつ、学習者が興味を持つような作品を取り入れることによって、映画の視聴経験が異文化理解の深まりに貢献する可能性を見出したい。

5. 本研究の限界

本研究の限界として、まず、「回答バイアス」が生じていた可能性がある。参加者募集での謝礼が、映画鑑賞後のディスカッションや振り返りの記述内容に影響を与え、研究目的に沿っていると参加者が考える方向で回答する傾向があった可能性もある。とりわけ、セッション1で実施した質問紙調査の事前調査の2時間後に事後調査が実施されていることから、回答バイアスが起こりやすい状況だったことが考えられる。さらに、韓国に関する態度尺度では、類似した項目が順番に配列されていたため、前の項目が後述の項目の回答結果に影響を与えていた可能性も考えられる⁽¹¹⁾。今後の研究ではボランティアでの研究参加者を募ったり、事前・事後調査の間隔を大きく開けたり、質問紙の項目の順序を工夫するなどして、回答バイアスが起こる可能性を低くしていきたいと考える。

もう一つの限界は、使用した質問紙調査の項目の妥当性である。自分の研究で利用する尺度を先行研究から探せば、分析手法を学ぶことは可能であるが、本研究で使用した韓国に関する態度尺度は40年ほど前に作成された尺度であり、当時の日本と韓国の関係と現在とでは大きく異なっている。それゆえ、項目の内容を理解するのが難しいと感じた参加者もいたかもしれない。尺度についての項目分析、特に項目ごとの点双列相関係数の算出を行うことで、尺度の適切さがわかり、今後同じ項目を使うときに、

そのまま使用すべきかについて示唆が得られると思われる。特に、事前調査での「国に対する非好意的叙述」($\alpha = .40$)と「韓国人に対する非好意的叙述」($\alpha = -.93$)の2尺度については、内的一貫性が他とかなり異なるため、項目の一部について文言が適切でないものがあるか、他とは異なる態度の側面を図っているかなど、何らかの問題が見られる可能性がある。また、天井効果が起こっている項目もあったことから、他の項目とパターンが異なる可能性もある。今後は研究のトレンドなども考慮しながら、質問紙における項目が妥当である尺度の使用を目指したい。

3つ目は、本研究では全員女性で、短期大学の学生という極めて限定的な対象者であったことから、本研究から得られた示唆を一般化することは難しいであろう。今後は、女性だけでなく男性も含めた幅広い年代を対象として円卓シネマを取り入れた研究を実施することで、日本での韓国語学習者に対する映画鑑賞や対話の効果を検証することが可能になると考えられる。

6. 今後の課題

円卓シネマ(伊藤・山本、2011)を参考にしながら実践した日本人学生と教員による映画鑑賞と対話は、韓国に対する共感を生むことはできなかったが、世代の異なる参加者の価値観や考え方の相違を明らかにした。映画鑑賞後の対話における教師の役割はモデレーターであったが、実際には必要以上に発言をしていた。したがって今後は、参加者の発言を効果的に引き出す手法、例えば、半構造化インタビューやフォーカス・グループ・インタビューなどを取り入れながらディスカッションを実施することが必要であろう。また、先行研究(伊藤・山本、2011; 山本・伊藤、2005)で見られるように、外国語学習者を対象に円卓シネマを実践するのであれば、日本人の韓国語学習者だけでなく、韓国人の日本語学習者をも含める必要がある。そうした場において、日本人の若者が関心を寄せているK-popなどに対する意見を同世代の韓国人と共有することも必要であろう。

今後は、韓国語以外の学習者に対する異文化理解教育として映画を活用することの意義を検証する必要がある。円卓シネマは、文化背景が異なる者同士で対話をすることによって文化間で生じる相違や類似点をお互いに

認識し、相手の考え方や価値観を尊重できるような機会をもたらす。日本人の異文化コミュニケーション能力の育成という観点からも、その有効性の検討が今後とも必要となるであろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 19K00842 の助成を受けた。また、第一著者が清泉女子大学言語教育研究所客員所員として活動した研究成果である。

本論文の執筆にあたり、辻あゆみさんと阿部恵子さんには下読みをしていただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

付記

本研究の結果は、日本心理学会第 85 回大会で発表された。

参考文献

藤原孝章 (2012). グローバル教育. 日本国際理解教育学会 (編)『現代国際理解教育事典』(p. 219) 明石書店

韓英均 (2013). 日本における韓流減少と韓国の韓流に対する認識.

<https://core.ac.uk/download/pdf/144446207.pdf>

服部兼敏 (2010). 『テキストマイニングで広がる看護の世界: Text Mining Studio を使いこなす』ナカニシヤ出版

稲垣(藤井) 勉 (2017). 多様性教育による韓国への潜在的・顕在的態度の変容可能性の検討. 『長崎大学 大学教育イノベーションセンター紀要』, 8, 62-79. https://nagasaki-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2257&item_no=1&page_id=13&block_id=21

伊藤哲司・山本登志哉 (2011). 『日韓傷ついた関係の修復: 円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界 2』北大路書房

上河原涼 (2015). 1980 年 5 月光州民主化運動の地域的・経済的条件. 『商学研究論集』, 42, 147-165. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1571417127750904192>

小平朋江・いとうたけひこ (2009). ナラティブ教材としての闘病記一多

- 様なメディアにおける精神障害者の語りの教育的活用－. 『マクロ・カウンセリング研究』, 8, 50-67.
- 小平朋江・いとうたけひこ (2013). ナラティブ教材を用いた精神看護学授業での統合失調症のイメージの変化：テキストマイニングによる特徴語と評価語の分析. 『日本精神保健看護学会誌』, 22(2), 68-74.
- Lin, M. (2018). “I don’t even know where Turkey is.”: Developing intercultural competence through e-pal exchanges. *Journal of Global Education and Research*, 2(2), 1-14.
- 溝上由紀・柴田昇 (2009). 「異文化理解」と外国語教育－教養教育の一形態として－. 『愛知江南短期大学紀要』, 39, 31-42. <https://www.konan.ac.jp/images/library/bulletin/k-No38-4.pdf>
- 森茂岳雄 (2012). 異文化理解教育. 日本国際理解教育学会 (編) 『現代国際理解教育事典』 (p. 217) 明石書店
- 村田光二・古畑和孝・宮田加久子・田中淳 (1979). 韓国及び韓国人に対する態度の研究：(I) 態度尺度の作成ならびに測定. 『日本教育心理学会総会発表論文集』, 21, 594-595.
- Oh, S. (2017). Dialogical Exchange Class Using Movies for Mutual Understanding between a Korean and a Japanese University. *Integrative Psychological Behavioral Science*, 51(3), 379-390. <https://doi.org/10.1007/s12124-017-9392-8>
- 呉宣児・崔順子・山本登志哉 (2014). 集団間異文化理解への試み (1) －日本と韓国の大学をつなぐ円卓シネマを通して－. 『共愛学園前橋国際大学論集』, 14, 127-143. <https://gair.media.gunma-u.ac.jp/dspace/bitstream/10087/8834/1/2014-oh.pdf>
- 大津和子 (2012). 国際理解教育の概念と目標. 日本国際理解教育学会 (編) 『現代国際理解教育事典』 (p. 14) 明石書店
- 榊原知美・片成男・高木光太郎 (2012). 集団間対話を通じた異文化理解のプロセス：日本・中国の大学間における交流授業の試み. 『国際教育評論』, 9, 1-17.
- 澤木美奈子・萩田紀博 (1995). 補完類似度による劣化印刷文字認識. 『信学技報 TECHNICAL REPORT OF IEICE』, 95, 101-108.

- 白戸圭一 (2021年7月1日) 『若者はマスメディア情報を見ない』という誤解 虚実が同居するネットとの付き合い方. 『朝日新聞 GLOBE+』
<https://globe.asahi.com/article/14384088>
- 総務省 (2021). 資料2: 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数 (令和3年1月1日現在) https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei02_02000233.html (2021年11月9日)
- 田中雄一郎 (2019). 日韓間の「従軍慰安婦」問題の萌芽と展開: メディア・フレーム論による日韓関係と韓国の政治社会的分析. 『法學政治學論究: 法律・政治・社会』, 121, 73-108. https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20190615-0073
- 山本登志哉・伊藤哲司 (2005). 『アジア映画をアジアの人々と愉しむ—円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界』 北大路書房

付録1 韓国に対する態度尺度（村田他、1979 より作成）

韓国という国は…

- 1 将来性のある国である
- 2 社会生活の改善がめざましい
- 3 合理的（＝無駄なく能率的な）価値判断を重視している
- 4 国民の福祉向上に力を注いでいる
- 5 人道的（＝人として守り行うべき道にかなった）国家である
- 6 民主的国家である
- 7 柔軟性のある国家である
- 8 有能な人材が抜擢される
- 9 社会が活気に満ちている
- 10 官僚（＝役人）組織が健全である
- 11 自由な空気がある
- 12 好戦的な（＝すぐ武力に訴える）国である
- 13 自国の非より他国の非を責める
- 14 不気味な国である
- 15 政治が腐敗している
- 16 独裁国家である
- 17 無実の人が苦しんでいる
- 18 言論の自由がない
- 19 政情（＝政治のなりゆき）が不安定である
- 20 軍部に支配された国である
- 21 弾圧的（＝害を加える）政治が行われている

韓国人は…

- 22 忍耐強い
- 23 平和を愛好する
- 24 礼儀正しい
- 25 思慮深い
- 26 自由を愛好する
- 27 平等を志向する
- 28 知的である
- 29 親切である
- 30 義理堅い
- 31 友好的である
- 32 寛容である

- 33 陽気である
- 34 知性が乏しい
- 35 信頼できない
- 36 卑屈(=いじけて、必要以上にいやしめること)である
- 37 残酷である
- 38 攻撃的である
- 39 好戦的である
- 40 自己中心的である
- 41 敵愾心(=相手に対する闘争心)が強い
- 42 権力におもねる(へつらう)
- 43 陰湿である
- 44 偏見が強い
- 45 反日的である
- 46 執念深い

付録2 韓国との接触経験尺度(稲垣(藤井)、2017)より作成)

- 1 今までに韓国を訪問した回数(回)
- 2 韓国人の友人の数(人)
- 3 韓国のテレビ・ドラマを視聴する頻度(全く見ない・ほとんど見ない・多少見る・よく見る)
- 4 これまで日韓交流イベントに参加したことがある(ない・何回かある・複数回ある)
- 5 これまでに韓国アイドルのコンサートやファンミーティングに行ったことがある(ない・何回かある・複数回ある)

付録3 韓国への関心尺度(稲垣(藤井)2017より作成)

- 47 韓国は好きではない
- 48 前より韓国について知っていることが増えた
- 49 韓国についてもっと調べてみようと思った
- 50 韓国とは距離を感じる
- 51 韓国文化への理解が深まった
- 52 韓国社会への関心が深まった
- 53 朝鮮戦争についてもっと知りたいと思った
- 54 ベトナム戦争についてもっと知りたいと思った
- 55 韓国人によるドイツへの集団出稼ぎについてもっと知りたいと思った